心の輪を広げる体験作文
【中学生区分】優秀作品

「この子」と出会って

千葉大学教育学部附属中学校　一年
降幡　優

私の通っていた小学校では、特別支援学級との関わりが多くありました。私達の教室のとなりに特別支援の教室があったり、掃除や校外学習にも、一緒に参加したりしました。私と同じ学年の子は男子と女子それぞれ一人ずつの二人いました。私は三年生になる時に長野県から転校してきました。女の子と一緒に給食を食べた時に「ゆうちゃん。」と言って私の名前を覚えていてくれました。それまで特別支援学級の子とは、あまり関わりがありませんでしたが、名前を覚えていてくれたのがうれしくて話しかけるうちに、ろう下で会ったら手を振るような仲になっていました。

その年の大掃除の日、私は特別支援の子達が使っている教室を掃除することになりました。雑巾がけをしていると、その子がかけ足で私のとなりに来て、床をふき始めました。そっと「ありがとう。」というと、その子はにこっと笑い返してくれました。そして掃除が終わり、私がその子に手を振ると、手を振り返してくれました。また、六年生の時の農山村留学では、民宿に泊まることになっていました。私はその子と同じ民宿になりました。その子は自分から色々な事を話してくれました。普段は大人しかったその子がたくさんしゃべっているのを初めて聞いた私は少し驚きましたが、せっかく同じ民宿に決まったんだからと思い、私も楽しく話していました。今思うと、あの農山村留学の時に心を開いてくれたんだと思いました。

私の友達で、特別支援学級の子とは話したくない、関わりたくない。と思っている子も少なくありませんでした。当然の事ですが、私はその考えは正しくないと思います。道徳の授業でどんなに「障がい者との関わり」について先生が教えたとしても、心から仲良くしようと思っている人が少ない気がします。確かに、私も特別支援学級の子達全員と仲良くなれた訳ではありません。

でも、私達が積極的に話しかけることで二つのいい事があります。一つ目は、障がいのある子たちが、他の人に話しかけやすくなるという事です。私達と話す事ができれば、他の人に話しかける勇気がでると思います。二つ目は、私達が関わり方を学べるという事です。簡単な説明ですぐに理解してもらうには、どう話したら良いかなど、日々の授業だけでは、あまりわからない事を学ぶことができます。

私は、この子との出会いで障がいがある人への見方が変わりました。障がいがあるとしても心に壁は無いと思います。まずはお互いの名前を覚えて、次に少しずつ距離を近づけることができたら、仲良くなれると思います。障がいも個性と考えれば、私達との違いはあり

ません。みんな平等に仲良くするべきだと思います。私は、私の考え方を変え、仲良くしてくれた「この子」に感謝しかありません。